

院外茶話

vol.138 平成 28 年 11 月 1 日

小さな村で生まれ育って
嫁入りしたのは隣村
その仮屋村で生涯を過ごした
てる婆さん

仮屋村の てる婆さん



てる婆さんはこの道を通って嫁に来た。

我が家はもともと若狭の仮屋村にあった。小浜から 10 キロほど離れた山村で、てる婆さんは隣村の熊川から嫁にきた。馬に乗って。

婆さんはここで 9 人の子を設けて、その長男が私の父。しかし当時は満足に育たない子供が多くて、成人をしたのは 5 人だけ。そのうち 2 人の叔父は、若くして亡くなったので、覚えていない。

人生 50 年と言われていた。てる婆さんの夫、つまり私の祖父も早くに他界をして、もちろん私はまだこの世にいなかった。

てる婆さんは小学校しか出なかったけど、こんな事情の中、女手一つで見事に 5 人の子供を育てあげた。山を売って、田畑を売って子供たちを東京や京都に送り出した。当時としては相当教育に熱心な人だったと思う。

男には職をもたせ、父は眼科医になった。女は嫁がせて、この辺までは思った通りにいったけど、終戦とともに農地は有無を言わず政府に買い上げられた。

その代価は一つの田んぼが豆一升。婆さんは

土一升到豆一升と言って怒っていた。

村での一人暮らしは楽ではなかったけれど、婆さんは子供たちを都会に出した後も、仮屋村を離れなかった。大昔の百姓屋にはガスも水道もない。少し足を引きずりながら、不自由な暮らしを続けていた。



茅葺屋根をトタンで覆ってしまった我が家。

ただ、冬の三か月だけは、雪に埋もれてしまうので東京にやって来た。

当時我が家は渋谷の広尾にあり、大きな敷地内には 2 軒の家が建って、親戚の 3 家族が同居。兄弟と従兄弟を合わせると、9 人の子供が暮す大所帯であった。

婆さんはその子供たちに、持てるだけの土産を持ってきた。特大のカバンを両手に持って、その中には若狭名物の焼き鯖、へしこ。半年かけて準備をした干し柿に、自家製茄子のからし漬。何より重いのが餅。

これをもって、平らな地面ならば何とか歩くことができる。でも、階段の上り下りをするときには、まずカバンを一つ運んで、そこから引き返してもう一つのカバンを運ぶ。

敦賀と米原と東京駅と、都合 3 回の乗り換えがあるので、その都度 2 回ずつ階段を上って下りた。

それでも、この土産物が喜ばれるうちはよかった。だんだん暮らしが豊かになれば、子供たちの嗜好も変わって、干し柿は売れ残り、豆餅にいたってはカビが生えて、どう処分をしたのだろう。

それでもてる婆さんは毎年、行商の格好をして現れた。3か月の間東京に滞在をして、時々親戚を訪ねて、春になると空のカバンをもって仮屋村に帰っていった。

やがて夏がくると、私と従兄弟たちは毎年大挙して、てる婆さんがいる若狭を訪れた。

東京駅を午後10時10分発の夜行列車、急行能登号に乗って、村に着くのは翌日の昼ころ。ガスも水道もない不便な暮らしは、まるでキャンプか冒険のよう。

風呂に入るときには、つるべで井戸水を汲みあげ、湯を沸かすのもご飯を炊くのも、薪を燃やしてあたりは煙だらけ。



鮎をとった北川の流れ。

昼間は近くの川で鮎を捕って、どじょうならば家の前の用水路で捕れた。海水浴は朝一番のバスで田鳥港に行って、帰りの麦わら帽子の中は紫雲丹とサザエが一杯。

これを抱えて、最終のバスに乗り遅れた時には、ダンプカーの運転手が家まで送ってくれた。婆さんはお礼を言うと家飛び出したけど、トラックはとっくに行ってしまった。

1度だけ婆さんが、昼飯を食べに連れて行ってくれたことがあった。それは当時、小浜では最高級の大谷食堂。一番上等な服を着て、緊張をして食べたけど、今にして思えばただの昼定食だった。

婆さんは夕食後に縁側で涼みながら、ときどき小声で自慢話をした。

それは熊川村で一番のべっぴんだったこと。

肥えているほど、ええおなごで17歳では17貫、18歳では18貫あった。その後も1年に1貫ずつ太って、21貫までいった。

身長は150cmくらいだったろうから、21貫と言えば80kg近くにもなる。それくらいべっぴんだった。そう聞いた。

日も暮れて隣村から帰るときには、山からオオカミが下りてきて、婆さんに少し遅れてついてくる。べっぴんのおなごが1人で歩いているので、オオカミは婆さんを無事に送り届けるためについてきたのである。

家に上がって明りをつけると、それを確かめたオオカミは、くるりと向きを変えて山に帰って行った。

てる婆さんが歩けなくなったと聞いて、迎えに行ったのは大学時代の冬休みだった。車で何時間かかったことだろう。

急な病ではなくて、自慢の体重を支え切れなくなった膝が痛んで歩けない。食べ物は少し持って行ったけれど、一両日中に荷物をまとめて、東京に連れ帰ることはできなかった。

結局、部屋の整理が終わるまで、婆さんと枕を並べて寝ることになる。薄くなった髪には無用のものに見えたけど、相変わらずの箱枕。廁までは遠くて歩けないので、夜中には枕元の石油缶に勢いよく小便をする音が響いた。



日本髪を崩さない箱枕。

暖房は囲炉裏がある。ただ、薪がないので腐りかかった縁側の床をはがして、火にくべた。近所の人が入れ代わり立ち代わり、漬物やちくわの差し入れをしてくれて、何とか食いつなぐことができた。

大きなカバン二つに荷造りを済ませたのは数日後。ようやく婆さんを車に乗せて若狭を出発した。

熊川から嫁に来て、てる婆さんが仮屋村で過ごした最後の日だった。